2019.8.22

大草

読書メモ

113.小林道彦「児玉源太郎」ミネルヴァ書房（2012.2）

114.長南政義「児玉源太郎」作品社（2019.6）

114.保坂正康「あの戦争は何だったのか」新潮社（2005.7）

115.半藤一利「あの戦争と日本人」文芸春秋（2011.1）

**＜小林道彦「児玉源太郎」から＞**

　児玉源太郎（1852年～1906年54歳没）は、西南戦争での熊本城籠城、台湾経営、旅順要塞攻防戦など「明治の栄光」そのものであるとか、明敏にして果断、採決流るるが如し、陽気で開放的な人物との評価がある。以下は、児玉源太郎の伝記から台湾総督としての児玉に纏わる箇所をメモにしたものである。

・日清戦争（1894.8～1895.4）、日露戦争（1904.2～1905.9）

・台湾総督（1898.2～1906.4の8年間）1906.7.23薨去54歳

・陸軍大臣（1900.12～1902.3の1年4ヶ月間）、1903.7内務大臣、1903.7文部大臣

・参謀本部次長（1903.10～1905.12）参謀本部次長事務取扱（1905.12～1906.7）

・児玉は、「軍人は紳士たるべし」とし、以下のことを軍人に求めた。

①礼儀、マナーの順守（酒席での醜態厳禁。高歌放吟、天下国家の議論、床の間放尿等）

②軍事専門家としての知識、教養

③行政に軍は従うこと

・児玉の台湾経営方針は、軍幹部への訓示の中に表現されている。児玉は「予の職務は台湾を治るにありて、台湾を征討するにあらず」という方針を示した。そして後藤新平を民生局長とし重用し、軍人の上に位置づけた。

・西南戦争での熊本城籠城以降の薩摩軍の掃討作戦の経験（治安対策や占領地行政など）を台湾経営に生かした。台湾の「土匪招降策」（帰順政策）として、土匪集団の来歴をよく調査し、「良民」に対しては帰順をゆるすが、「犯罪者」や帰順に肯んじない土匪集団に対しては軍隊ではなく警察力を主体とする「討伐」を行い効率よく全台湾を平定した。児玉の前任の乃木希典も同様の政策をとっていたが、帰順資格が曖昧であり効果が上がっていなかった。明治30年から34年（1897年～1901年）までに台湾総督府が捕縛した土匪は、8030人、うち殺戮した者3473人、明治35年大討伐で死刑執行した者539人、投降までのトラブルで「臨機処分に附して殺戮」した者4043人に及んだ。一方、土匪による一般台湾人への加害も甚だしく、同一期間内における加害件数8903件、殺害された者2459人であった。投降して「良民」となった元「土匪」に対して土木事業などの仕事を与え土匪の鎮圧と生計の安定を図った

・児玉は、土匪が帰順し「良民」になれば「一視同仁」主義で差別せず平等に応じた。英国のインド支配に典型的な「分断して統治せよ」式の統治は採用しなかった。明石元二郎が唱えた元「土匪」を採用し、土匪の討伐に当たらせる方式もとらなかった。これをやると台湾社会に大きな傷跡を残してしまうため、この方式を避けたのであった。

・児玉は、明治31年（1898年）に台湾総督に任命されたとき46歳で、1902年には陸軍大臣を兼務し大変多忙であった。台湾総督でありながら、台湾にいることは少なく、後藤新平に経営を任せていたが、要所要所で台湾総督としての重要な役割を果たした。

・児玉は、台湾経営のために鉄道、港湾、水道などの社会資本の整備を進め、民生の安定と基幹産業の育成を図った。その一つが、新渡戸稲造の招聘による製糖業の近代化であった。また、病院等の衛生設備の整備により、「瘴癘（しょうれい）」の克服にも当たらせた。1901年、台湾総統府の権力中央集権化を図るため、総督府に「警務局」を置き、臨時急変時に警務局長が、各庁下の警察官を直接指揮できるようにした。

・塩川正十郎（東洋大学元総長）の言葉。「「評論家は「だと思います」「であるべきであります」「こうなると思います」という。しかし政治家は違う。「こうであります」「こうなります」と決意を断定して言うのが政治家の言葉だ」」児玉の言葉は常に断定であり、政治家への第一歩を踏み出していたといえる。

・児玉神社が江の島の中腹に建設されたとき資金不足で建設が行き詰ったが、台湾の有志が募金をしてすぐに建設費が賄えたとのことである。台湾で高く評価され人気があったことが伺える。

・陸軍大臣を務めた児玉は、日露戦争の前に2階級下の参謀本部次長の職を拝命し、戦争準備や戦争指導に奔走した。児玉が日露戦争勝利後まもなく死亡したのは、この日露戦争時の激務がもとで脳梗塞を再発したことによるといわれている。

・陸軍次官であった児玉源太郎の業績の中で、特筆すべきことは、近代軍備をシステムとして捉え、狭義の軍備だけでなく、軍事力の効率的な運用を可能にする社会資本、すなわち、鉄道、港湾、上下水道などの整備に尽力したことである。例えば、以下がある。

①広島市の上水道は勅命により「軍用水道」として速成されたが、これを推進したのは伊藤博文と児玉であった。

②海軍煉炭製造所（後の海軍燃料廠）の徳山への誘致。これが発展し、現在は石油化学コンビナートとして工業都市徳山を支えている。

③山陽本線の速成（明治34年1901年5月全開通）。西日本の社会資本の整備に尽力したのは、出身地域への利益誘導ではなく、朝鮮半島有事を睨んでのことであった。（児玉は、山口県徳山藩の生まれ、現周南市児玉町）

**＜長南政義「児玉源太郎」から＞**

児玉源太郎の抜群の知力が、その圧倒的統率力の源の一つであった。

①将来的なヴィジョン

②ヴィジョンに基づく組織、兵器、操典（ドクトリン）の大改革

③大胆なリストラと予算の流れの変更

④調整能力

⑤人材抜擢の巧みさ

⑥圧倒的な内部統制力

⑦決断力と実行力

**＜保坂正康「あの戦争は何だったのか」から＞**

保坂正康の太平洋戦争への批判は以下の2点にあった。

①なぜあのような目的も曖昧な戦争を3年8カ月も続けたのかの説明責任が果たされていないこと。

②戦争指導にあたって、政治、軍事指導者には、同時代から権力を賦与されたろうが、祖先、児孫を含めてこの国の歴史上において権限は与えられていなかったこと。

（分かり易く言うと、当時の戦争指導者には、「一億総特攻」とか「国民の血の最後の一滴まで戦う」などと言って、国民を戦争に駆り立て殺す権利は、「歴史上」与えられていなかったということ）

**＜ユーチューブ「日本人はすごかった」から＞**

　世界各国の要人の証言として、紹介されている内容が面白かった。

・SF作家　H・Gウェルズ

　この第二次世界大戦は、植民地主義に終止符を打ち、白人と有色人種との平等をもたらし、世界連邦の礎石をおいた。あの戦争の敗者は日本ではない。真の敗者は、植民地をほとんど失った欧米列強である。

・社会学者　ヘレン・ミアーズ

　東京裁判は正義ではなく、明らかなリンチだ。私たちアメリカがどうして日本を罰することができるのか？私には理解できない。

・ビルマ首相　バ・モウ

　我々を白人支配から救い出してくれたのは日本だった。我々は大戦終盤に日本を見限ったが、その恩は忘れない。日本ほどアジアに貢献した国はない。日本ほど誤解を受けている国はない。

・タイ首相　ククリット・プラモード

　日本のお蔭でアジアは独立できました。日本というお母さんは母体を壊してまでも、アジア諸国という子供を産んでくれました。今日、アジア諸国が欧米と対等に話ができるのは誰のお蔭か。それは自らを殺してまで産んでくれた、日本というお母さんがあったからだ。我々はお母さんがお産を決意した12月8日を、すべての力を出し尽くし私たちの国を産み力尽きた8月15日を忘れてはならない。

・マレーシア上院議員　ラジャ・ダド・ノンテック

　我々は日本軍を歓呼で迎えた。日本は将来の我々の独立のために多くのものをもたらしてくれた。我々が日本から学んだ最大のものは、「国を守る術」だった。かつて日本人は清らかで美しかった。かつて日本人は親切で心豊かだった。アジアの国の誰にでも、自分のことのように一生懸命尽くしてくれた。

・シンガポール首相　ゴー・チョクトン

　日本の統治は過酷なものだった。しかし日本軍により、欧米のアジア支配は粉砕された。これはアジアに自信を与えた。大戦後約15年以内にアジアの植民地は全て解放された。

**＜半藤一利「あの戦争と日本人」から＞**

　日露戦争（明治37年1904年2月8日～1905年9月5日）の真実について。

日露戦争後に公表された官修戦史は、国家にとって都合のよいものに加工され、事実とは異なる箇所があった。（しかし、海軍、陸軍共に事実を克明に記録した戦史を残していた。海軍では、「極秘明治三十七八年海戦史」150巻。陸軍は、参謀本部編「手稿本　日露戦史」51巻。）

・乃木希典が1904年11月27日に203高地攻撃を決断したとき、ロシア旅順艦隊は既に廃物となっており、旅順要塞攻撃そのものが無意味となっていた。戦艦の大砲は取り外され陸地砲に転用されており、又日本の28センチ榴弾砲撃で既にロシア旅順艦隊は破壊されていたという。2万人に及ぶ日本兵士の死は必要なかった。この歴史的事実は昭和末期まで秘されていた。

・バルチック艦隊がウラジオストック港に入るには、対馬海峡、津軽海峡、宗谷海峡の三ルートがあった。連合艦隊の参謀たちは、バルチック艦隊は最短の対馬海峡を通ると予測、時速10ノットで進むと仮定し、5月22日までに見つかると考えていた。しかし、23日になっても24日になっても発見されない。連合艦隊司令部は、太平洋を回り津軽海峡の方に回ったと考えて議論が沸騰した。連合艦隊は、「密封命令」を艦隊の各司令官に配っておいた。内容は「敵は北海道に迂回したるものと推断す。当隊は12ノット以上をもって波島に向かい移動せんとす」というもの。指定開封の5月25日午後3時をもって、全艦隊が一斉に津軽海峡に向かうと決めていた。

第二艦隊の参謀長藤井較一大佐が旗艦三笠に出向き説得する。バルチック艦隊は病院船、石炭船、輸送船などを含んでおり、時速8ノットがいいとこであり、対馬を動くべきでないと。日本近海には5月27日か28日に現れるはずだと。東郷司令長官が密封命令の開封期限を24時間先延ばしすることにした。

5月26日朝、バルチック艦隊が上海港に入ったとの情報が入り、対馬海峡でそのまま待機することになり、日本海海戦に繋がった。この事実も封印された。

・「天気晴朗なれども波高し」の意味について。日本海軍は、爆雷を2個麻紐10mでつなぎ、敵艦の進路に投げ入れ麻紐に敵艦の舳が引っかかり両側で爆雷が爆発して敵艦を沈めるという極秘戦法をも計画していた。ところが、波が高すぎるためこの極秘戦法は使えないということを連合艦隊から大本営に伝える内容であった。この事実も隠された。天気がよく波も高く海戦への気概を示したものではなかったのである。

・日本海海戦の「東郷ターン」などで有名なT字戦法は一般に信じられているものとは全く違っていた。（この本には、具体的な差異の記載なし）

・（以上のような事実は、一般国民に公表される官修戦史には掲載されなかった。）

・司馬遼太郎は、「もしこの膨大な国費を投じて編纂された官修戦史が、国民とその子孫たちへの冷厳な報告書として編まれていたならば、昭和前期の日本の滑稽すぎるほどの神秘的国家観や、あるいはそこから発想されて瀆武の行為をくりかえし、結局は日本とアジアに15年戦争の不幸をもたらしたというようなその後の歴史は今少し違ったものになっていたに違いない」といったがその通りと思います。東郷の言ったように「勝って兜の緒を締め」なかった。残されたのは、勝利の神話だけです。歴史の教訓から最も学ぶべきリアリズムが消えてしまうのは、日本人の非常に困ったところです。あえていえば、太平洋戦争の真の敗因は日露戦争にあったのです。いやなぜあのような愚かな戦争をしたのか、ということも、つきつめると勝利の神話のみ語り継いできたためといえるかと思います。

・なぜ、事実を隠したのか？その理由は2つ。

①国民に非常な忍耐を強いてきたのに、勝利の喜びに水を浴びせるような訳にはいかない。さらなる報国と献身を国民に訴え続けることにした。

②日露戦争で戦った軍人、官僚、文官の叙勲があり、華々しい連戦連勝の戦史を作らざるを得なくなった。（叙勲を受けた人の名誉を守り叙勲を正当化するためには事実を書くわけにはいかなかった）

・日露戦争後の日本人はどんなふうに変ったのか。4つ。

①出世主義、学歴偏重主義の世となった。軍人は勝てば華族になれる、「東大7教授事件」（日露戦争前に東大の7教授が開戦すべきとの意見書を提出した）のように、国家に影響を与えて国民の世論を動かしたいと思うようになり、いい学校へ行き、出世したいと皆が思うようになった。「末は博士か大臣か」

②金権主義の時代が来た。金があれば学歴がなくても爵位を買って華族になれる現実があった。

③享楽主義。世の中全体が真面目さと真剣さを失った。享楽主義に乗り遅れた者が虚無主義や社会主義に走った。

④社会主義が広まってきた。

日露戦争後、日本人は、国のために命がけで働いた幕末の志士たちや日本を独立近代国家に育てるために努力してきた日本人とは別の人たちとなった。国家のために一所懸命になった時代は日露戦争までと言われる。

・憂国の評論家、徳富蘇峰は憤慨して以下を書いた。

「安逸にふけり、放漫に流れ、国家経綸のことに無頓着なるが如き兆候も決して皆無と断ずるを得ず。―――我が国民小成に安んじ、大志を失い、―――国事に冷淡、不熱心、無頓着なるより甚だしきはなし」（「向う所如何」明治39年3月25日）どうも今の日本人のことを語っているみたいにも思えるんだけど（（笑）半藤一利）。

・明治維新以来、長い間にわたって保たれてきた国家的目標に関する積極的かつ忍耐的な国民的合意が、日露戦争後に失われてしまった。そこから、新しい国家目的を形成する必要が出てきた、そのための「愛国心」とか「大和魂」というスローガンであったかもしれませんね。

・上から教え込んでいく一律の教育が、日露戦争後に結実したともいえるんです。

以上